

研 究 紀 要

国 語 部 会

実践発表1

「ICT×インクルーシブ教育 定時制の国語表現」

青森県立弘前工業高等学校 青 木 雅 俊 …… 1

実践発表2

「故事成語を基に、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めるための学習

—『読んで、訳して、その先に』漢文における実践研究—」

青森県立青森西高等学校 長 嶺 海 …… 3

公開授業・研究協議

現代文 青森県立八戸西高等学校 平 川 彩 子 …… 5

古 文 青森県立八戸西高等学校 大 嶋 晃 子 …… 6

漢 文 青森県立八戸西高等学校 石 川 孝 …… 7

部 会 の 動 き …… 9

研 究 テ ー マ …… 10

紀要編集委員 鈴 木 志 保（青森県立八戸北高等学校）

国語部会

実践発表 1

「ICT×インクルーシブ教育 定時制の国語表現」

発表者 青森県立弘前工業高等学校 青 木 雅 俊
助言者 弘前大学教育学部 准教授 田 中 拓 郎
弘前大学教育学部 准教授 鈴 木 愛 理
弘前大学教育学部 助 教 帆 苅 基 生
記録者 青森県立三本木高等学校 阿 部 友 里

1 生徒の実態

本校定時制には働きながら通学している生徒はいない。小・中学校で何らかの事情を抱え、普通高校の受験が難しかった生徒が在籍している。来年度で閉課程を迎えるため、現在の生徒数は4年次5名、3年次1名の計6名である。ほぼ全員が配慮を要する生徒であり、自己肯定感が非常に低い。

本校生徒は特に書くことを非常に苦手としているが「問いを理解していない」ということではない。授業において口頭でやりとりをすると、問われていることは理解しているが、それでも書かない。間違えることが嫌であること、字が汚いの嫌であること、漢字が分からないことが原因のようだ。しかし、いずれは就職活動に必要な履歴書や作文を書かなければならないのが実態である。

2 指導の経緯

当初は「何を書いたら良いのか分からない」ことについて対策を取ればよいと考えていた。内容ではなく書き方の問題であると考え、書くための型を与えればよいと考えた。三角ロジック（根拠・理由・主張の3つを論として形作らせる）を常に意識させて書かせると、ある程度の効果を得ることができた。しかし口頭で確認すると答えられることが、それを文章で書いてみるよう指示すると生徒達は書くことができなかった。

そこで参考文献『ICT×インクルーシブ教育』を参照したところ、書くという手を動かす行為自体に抵抗を覚えている生徒が、ICTを活用することで頭の中で出来上がっていることを表現する事例が紹介されていた。「書くことに困難を感じている児童がいたら、その児童にとって学びやすい環境を用意したい」という言葉に感銘を受け、実践を試みた。

3 実施内容

参考文献として、アニメ・Jpopを国語教育に活用するという『サブカル国語教育学』を用いた。教材には、万葉集の和歌が二首用いられている新海誠監督のアニメ『言の葉の庭』を用いた。和歌の現代語訳を31文字に収めるという言語活動を国語表現の授業で行うこととした。

Google Workspaceのスライドで和歌の代表的な現代語訳を紹介し、生徒にも現代語訳に挑戦させた。結果、和歌の形式に沿っておらず、内容の取捨選択がなされていないものが多くなってしまった。そこで、物語の内容を理解するため心中語に注目させた。『言の葉の庭』は小説化されているため、和歌の詠まれたシーンから心中語を探す作業をした。小・中学校で学習していなかったためか、初めてのものを探すかのようにたいへん盛り上がった。その後、一番の本音だと思う語を探して現代語訳し、その理由を三角ロジックで書くという授業を行った。結果、これまで何も書いてこなかった生徒が現代語訳とその根拠を書き上げることができた。

Google ドキュメントを使い課題をコピーで渡すことによって教師と生徒間のやりとりが可能となり、他の生徒は見るができなくなるため、「他の生徒に見られたくない・発表したくない」といった生徒の気持ちも緩和することができた。また、コメントでやりとりをすることで、内容をブラッシュアップすることができた。

4 まとめ

ICTで代用してもらうことにより「書く」という行為自体への抵抗感が薄れ、授業内容を考えることに集中できた。また、コメントでやりとりすることにより、個別最適な学びをできたのではないかと考える。これらの実践により「誰一人取り残さない学びーSDGs」の一端を担うことができたのではないかと考える。

5 助言

(田中先生) 熱意ある発表であったという一点につける。三角ロジックは小学校で習うものだが、三角ロジックを用い、その理由づけまでしっかりさせることが国語の力につながる。今回の発表は、「ICT×インクルーシブ教育」をあえて定時制生徒に行ったという実践を、私たちに投げかけているのではないか。「この実践を通して、どんな力がついたのか」や生徒6人の感想があれば、更に素晴らしい発表になったと思う。

(帆苺先生) 「誰一人取り残さない学び」は、とても大切なことだと感じた。ICTという先端技術を用いることで、合理的配慮が必要な生徒がハンディキャップを乗り越えられる可能性を感じた。国語を学ぶ上では「自分ごととして考える」視点が大切である。今これを読んでいる自分たちはこれをどう理解し考えるのか、文化・文学とはありがたいものではなく自分たちの身近な、全ての所にあるのだということを、授業の中で実感させることができるのだとたいへん参考になった。

(鈴木先生) 生徒の実態を把握することが教育の原点だと改めて感じた。一番大事なのは目の前にいる子どもたちの実態を先生方が知ることである。個別最適な学びについても、学習者本人が自分たちはどのような存在なのかということを把握した上で行われなければならない。今回の実践は、目の前の子どもにどのような言葉の力が必要なのか、それが身についた時、どのように学びの実感を持たせることができるのか、という点において工夫されていた。国語の学習においては、「読めない」テキストに出会うことが大切である。読めないからこそ、読める喜びや読むことについて考えることができるのが高校での学びである。

実践発表2

「故事成語を基に、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めるための学習 －『読んで、訳して、その先に』漢文における実践研究－」

発表者 青森県立青森西高等学校 長 嶺 海
助言者 弘前大学教育学部 准教授 田 中 拓 郎
弘前大学教育学部 准教授 鈴 木 愛 理
弘前大学教育学部 助 教 帆 苺 基 生
記録者 青森県立三本木高等学校 阿 部 友 里

1 生徒の実態

進路多様校であり、ほとんどの生徒が推薦入試で進学する。生徒は素直で真面目、明るく優しい生徒が多い。部活動も盛んで活気がある。しかし、学ぶことに対して否定的な考えを持つ生徒や、努力できる環境にないことから学習することを諦めてしまう生徒、受験で使用しない古典を嫌いになってしまう生徒が多い印象である。古典に対する生徒の意識をアンケート調査したところ、「古典に興味があるか」、「古典が得意か」というアンケートに対して、半数以上の生徒は否定的に回答した。「苦手」と回答する生徒は7割になる。「得意」と回答する生徒は、古典のストーリーや言語面、古典の背景などにも幅広く興味を持っている様子であった。「興味が無い」と答えた生徒は語句や文法を苦手とする他、「読めないから」と解答した生徒が全体の20%を占めていた。

2 指導の経緯

アンケート結果をみると、読めないことが古典の苦手意識に繋がっているようである。読めるようになって語句を記憶、理解できるようになればよいのではないかと思った。発音できない言葉を概念化するのは不可能だと考え、まずは音読できることを前提に実践内容を組み立てた。その後は現代語訳とストーリー把握をし、表現活動から自分の力を獲得していくというサイクルで指導を行った。ICTが普及した現代では、インターネットで現代語訳を容易に調べることができる。訳だけでなく、訳したその先にある力を生徒に身につけて欲しい。

3 実施内容

読めるようになるために、音読を重視した。まずは範読する際、筆記用具を持たせて読みと順序を確認しながら行う。その次に教師が音読した後に生徒が追いかけ読みを行い、その次に生徒が1文を読んで他の生徒が追いかけ読みをする。その後はペア読みでさらに音読を重ねていく。ペア読みの際も筆記用具を準備するよう声かけを行う。教室にノイズのある方が気兼ねなく読み聞かせることができる生徒が多いため、効果的であった。学習後のアンケートでは多くの生徒が音読を通して「苦手意識がなくなった」と前向きな回答を示した。その後、表現活動を行う前にまずは現代語訳を行う。書くことへの抵抗の軽減や、復習時のポイントを絞る目的でワークシートを使用している。

表現活動は2つ。1つはストーリーを4コマにする活動、もう1つは生徒が試験問題を予想して作ってみるという活動である。読んだ内容を4コマにまとめることで、話の流れや情景をイメージしやすくなった。生徒自身がストーリーを理解していると、学習内容も記憶に残りやすいようである。また、試験問題を作る活動では、作題した生徒が解答の際の注意点をメモ書きする姿も見られ、問われる知識や学習の要点を押さえようとしているようであった。

その後、本の中の出来事を本の中の出来事で終わらせずに自分事に引きつけるために、生徒に考えてもらう活動を取り入れて実践した。『画竜点睛』では竜の眼を入れる工程に注目し、現代でも「眼を入れることで完成するもの」にはどのようなものがあるか、タブレットを用いて調査を行った。また、『推敲』では既存の詩や短歌の一部分を穴埋めにし、生徒が歌に合う表現を自分なりに考える活動を行った。古典を本の中の文章とせず、現代の自分たちの生活の実感と結びつけて考えることに繋げることができた。

4 まとめ

学習後に再度、古典の意識に関するアンケートを行った結果、「古典に興味があるか」の質問に対して「興味が出た」と回答した生徒が9割近くになった。理由としては古典のストーリーや時代背景へ興味をもった生徒が増えたようであ

る。まだ「興味が出ない」と回答した生徒の中でも、「読めないから」「現代文と関係ないから」などと回答した生徒の数は減少していた。音読を丁寧に行うことで、読めることが分かることへと繋がったが、1年次の言語文化では時間の確保が難しいため、授業速度と内容の両立が課題である。他にも、生徒自身が自分の学びが深化したという実感と、それを結びつけて示す明確な客観的評価基準が定まっていないこと、高校生として何をどのレベルまで身につけるべきかを精選する必要があることなどが課題として挙げられる。

5 助言

(帆苺先生) 自分事として考えるという言葉が何度も登場していることに注目した。古文や漢文をありがたいもの、離れたものとしてではなく、もっと現代の生徒の生活にとって身近なものとして読むという認識を生徒にもってもらうための参考になった。

(鈴木先生) 高校の古文漢文の学びというのは、日常生活や人生の役に立つ実感が湧きにくいものである。すぐに役立つものだけを学べばそれで良いのかということを高校生の段階で考えることは大切なこと。読めない文章に出会った時、それを読もうとすることにどのような意味があるのか。読めない文章なら読まなくてもいいのか。古文・漢文だけでなく現代日本語や英語の文章なども含めて、読むことについて考える機会になった。また、習っていない鑑賞文であっても、書き方を調べて書いてみるという活動の場を設けている点がおもしろいと思った。学校で習うことが全てではない。社会にでると自分で調べて実践する力も必要になる能力であり、何かを調べる際にどのように調べると良いのかを知ることは大切である。

研究協議 1 現代文

発表者	青森県立八戸西高等学校	平 川 彩 子
助言者	弘前大学教育学部 准教授	田 中 拓 郎
司会者	青森県立三本木農業恵拓高等学校	木 村 巧
記録者	青森県立八戸商業高等学校	中 村 克 子

1 授業教材

小説『羅生門』芥川龍之介

2 授業者より

国語を苦手としている生徒の多いクラスである。特に男子に多いのだが、そういう生徒たちが「読む」ということから離れがちであると日頃授業をしていて感じていた。今回の授業を通して、描写に気を付けて見ていくのが良いという話をしてきた。そういうところに着目しながら、描写の違いから伝わってくるものの違い、筆者がなぜそういう書き方をしたのかというところまで思考を深めることができれば「読む」ことに対する興味関心が高められるのではないかと思います、それをねらいとして設定した。

また、新しい教育課程になり小説を「現代の国語」で扱わないということになったので、扱い方として工夫しなければならないということが出てきた。小説を「現代の国語」の中でどのように扱っていくかと考えたときに、今回のように考えたことを記述するという形で「読むこと」また「表現すること」の力を高められるのではないかと考え、授業の目標設定とした。

本校の生徒の特徴として発問をしたときに自由に自分の意見を述べるということが非常に少ない。自分の解答に自信がないとか人の前で発言することに恥ずかしさがあるとか、そういう生徒が多い。しかし、周りの人と話し合いをさせると意見を出して話している姿が見受けられたので、そういう生徒たちの声を何とかして全体で共有することができたらと思った。普段から本校ではClassi NOTEを使った学習をしている。それを活用し、みんなで共有して考えまとめていくという作業をするという点が今回工夫した点であった。

挑戦したことは少し高めのテーマ設定をしたことである。表現の違いから最終的に人間の心理描写まで言及することができる生徒がどのくらいいるのかわからなかった。違いだけを述べて感覚的な印象だけでまとめるのではないかと思ったが、そこは彼らにかけてみようと考え、高めの目標設定をした。

苦労した点は、集中力のない生徒が何人かおり、何回も起こさなければ起きないという生徒への指導である。そういう生徒をいかにしてもっとわくわくさせられるかというのが苦労している点だ。一方で教えたい部分や伝えたい部分もたくさんある中で、メリハリの付け方とかどのような授業展開をすればどちらも両立させられる授業ができるのかというところはみなさんにお聞きしたいと思っている。

3 助言者より

今回の大会テーマに『『ことばの力』を育み『学びの実感』ができる』とあった。令和元年度は「ことばによる見方考え方を働かせる国語科授業の創造」だった。これはいわゆる教師目線である。「学びの実感」だと主語は生徒である。私はこれを頂いた時に、先生目線から生徒目線に変わってきたのだと感じた。学習指導要領のこともあろうと思うが、いよいよ高校も変わってきているのだというのが私の実感だ。それは何かと言うと、これまでの授業はいわゆる教材主義であった。教材主義のコンテンツベースの授業から今日のようなコンピテンシーベースの授業、つまり資質能力型の授業に変わってきているということである。また、今の1年生はそうしなければならない。そのような授業が今求められているのだと私は考える。具体的には、作品の内容とか形式について批評したり討論したりする授業が求められている。もっと言うとな『羅生門』を読むということも大事だが、それにプラスαして、例えば『羅生門』はなぜこんなに好まれているのか考えよう」という單元だと変わってくる。このように少しずつシフトチェンジしていただきたい。これまでの授業を「正解型」とすれば、「最適解」「納得解」への授業に転換していかなければならないと考えている。今日の平川先生の授業はまさに生徒主体の授業であった。生徒にどんな力をつけるかが基本的に大切だ。これまでの読解力も大切だが、これからの読解力も必要だと私は考える。

今日は生徒がたくさん言語活動をしていた。そうすることによって「納得解」「最適解」に近づけばそれがベストだ。教師が一方向的に講義をするよりもあのようにシフトチェンジしていくことがやはり大切である。それが今回

のテーマの「学びの実感」につながると思う。

授業の最後に評価をしていた。小・中学校では「振り返り」というものがある。今日は学習内容の振り返りだった。「振り返り」には4つあって、他に学習方法、学習形態、学習活動、そして大事な資質能力についての振り返りがある。『羅生門』を読んでどのような力がついたのかを自覚しなければならない。私はそれが入試にもつながると考える。

「現代の国語」としての『羅生門』と「言語文化」として『羅生門』についてだが、みなさんご存知のように「現代の国語」では小説は資料扱いとか参考扱いとか補助資料のような形で扱うように文部科学省では言っている。一方「言語文化」は本教材、いわゆる小説を読むというのが本筋である。今日の授業はどちらでも良いと思うが、小説を読むという視点であれば「言語文化」と考えても差し支えない。要は生徒にどのような力をつけるのかということに視点を当てれば良い。

評価については、『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」のp88～92を参照。

研究協議2 古文

発表者	青森県立八戸西高等学校	大嶋晃子
助言者	弘前大学教育学部 助教	帆苅基生
司会者	青森県立八戸工業高等学校	大舘富夫
記録者	青森県立八戸高等学校	竹田有理沙

1 授業教材

小説『羅生門』

2 授業者より

緊張したが、子どもたちは意外といつも通りのびのびとやっていた。文法や現代語訳を終えた最後の一コマとして、なぜ古典を学ぶのかを自分達の実生活と重ねてリアルに感じてもらえたらという思いでやっていた。それが反映できたと思う。良かった点は、生徒全体に問いかけた時に発言してくれる生徒がいたことや、個別に当てた時も自分なりの意見を言ってくれたこと。初めのワークシートに取り組む時は難しいだろうと思ったが、隣の人との話し合いからヒントを得て考えてくれた。子どもたちが頑張ってくれた。悪かったと思う点は、私の説明が長過ぎたので、特に五大災厄の説明をコンパクトにしてワークシートに時間をかけて、最後に方丈記を現代の我々が読み継いでいくのはなぜなのだろうという所まで持っていけると良かった。

授業を考えた時には誘導する形で進めていこうと思っていたが、自分の思ったように生徒の反応があってそれなりに思う形で進められた。一方で、生徒が自由に話を進めていくやり方というのもあるので、これからはそういった授業が求められるのだと思う。今回は「『無常』というのは生きていく中で考えてしまうよね」ということを誘導したという形になった。タブレットについては、個人的には毎回使わなければならないとは思わないが、今回使ってみた。

3 助言者より

タブレットに関して、やはりまだ難しさというものはある。縦書きに弱いと感じており、日本語の文化というのは縦書きで継承されてきたもの。書くということは横書きで左から書いても変わらないが、縦書きの文化を守っているのは学校の中で国語の授業だけだと思う。様々な論文も出版されるときは縦書きに直して出される。そういった意味で縦書きの文化というものを学校が継承する役割があるのであれば、手で書いたものを写真に撮って活用する、Classi NOTEのような新しいものと併用させるという点が今回たいへん勉強になった。やはり、縦書きを読んだり書いたりという従来の国語の授業で自然となされてきたことがタブレットになると扱いにくいというのが、使いにくさを感じる一因なのではないかと考える。単純に機械が苦手という理由だけではない気がする。ある意味では仕方がないことだが、おそらく今後そういったものも併用していくとなると、手書きしたものをデータとして残すというのは一つの方法なのだと思う。

授業については、文法を終えた段階ということで踏み込んだ内容になっていた。現代のことと結びつけて考える

という点がたいへん興味深かった。いわゆる古典の中にも、現代に通じるようなある種の普遍的な要素を見ていくということが大事だなと思った。一方でやはり、現代の小説も同様であるが、あらゆる作られたものは時代や社会の制約を受けているという時代の産物の側面もある。五大災厄があったこの鎌倉時代という時期に、鴨長明が生きて、彼の立場で色々ものを考えて、方丈の中に籠もって生活するという中で編まれた書物のため、やはりその両面を併せて考えていくことが大事である。先ほど大島先生は説明が長かったとおっしゃっていたが、生徒の様子を見た時には真剣にしっかり聞いている様子であった。読んで自由に感想をもつというのは大事なことだが、一方で書かれた者がどういう時代の中でどういう意義があるのか、それを補うことによって理解が深まることもある。そういった意味で今回のような時代背景の説明は非常に大切だったのではないかと。もし生徒からずれた解答が出た場合には、本文に立ち返らせて考えさせようとした、とのことだが、国語の授業というものは本文あって成立する科目だと思うので、読むということに立ち返らせるというのは非常に重要なことである。

研究協議3 漢文

発表者	青森県立八戸西高等学校	石川	孝
助言者	弘前大学教育学部 准教授	鈴木	愛理
司会者	青森県立八戸西高等学校	八木田	一義
記録者	青森県立三沢商業高等学校	木村	紗弥子

1 授業教材

再読文字

2 授業者より

- ・普段は「現代の国語」を担当しているクラスである。夏期講習は2名の教員が担当クラスを入れ替えて漢文の授業を行った。
- ・動詞や助動詞の活用表暗唱は夏期講習で初めて行った。漢文を学習するにあたり、助詞や助動詞のひらがなは早い時期に定着させた方が良くと思ってのことである。
- ・デジタル教科書の副教材に手を加えて使用した授業であった。
- ・授業の反応を見て生徒の弱点がわかるため、普段からClassiを使用している。本日は26名での授業であったため、このような授業形式（授業内に一人ひとりの生徒へ評価をフィードバックする形）で対応できた。40名で行うとすれば、困難だと考える。
- ・Live配信だと見ているだけで勉強した気持ちになってしまうため、自学にならないことが予想される。よって、チャット機能を使用する頻度が高い。
- ・タブレット端末を忘れた場合や充電不足の場合にはスマートフォンで代用が可能である。

3 助言者より

テンポが良い授業だと感じた。大人に近い高校生であっても指示は大切だが、本授業でも適切な指示が出されていた。

(1) ICTの活用について

個人差があるので、それぞれに合ったものを使用することが大切である。データの蓄積ができ、持ち運びも容易で、検索・共有・公開ができるという利点はある。しかし、実際の大学入学試験では素早く正確に書くことが必要となるため、時と場合に応じて手書きとタブレット端末を使い分けたり、タブレット端末でもタッチペンを使用したりするなど、工夫の必要がある。

(2) 漢文について

漢文「を」学ぶのか、漢文「で」学ぶのか。漢文「を」学ぶときの、楽しく、面白く乗り切り、漢文「で」学ぶ段階まで誘導することが大変な科目である。小学校や中学校での「親しむ」段階に加えて、「考える」こと

も必要となる。

(3) 学校における学びについて

学校で学ぶことのうち、大学入試は一部分であるという気持ちをどれだけ生徒と共有できるか、入試のための勉強ではなく、勉強したことの一部分が入試であることを理解させることができるか。大学入試以上の学びをしているという自覚が芽生えれば、モチベーションが違ってくる。「主体的な学び」の姿というのは、試行錯誤を継続しているかどうかということだと考える。そのためには見通しと振り返りが必要であり、生徒自身が自分の学習をマネジメントできるような人間になっていくためには、何のための学習なのか、という観点からのアプローチが大切である。

部 会 の 動 き

- 1 令和4年度 青森県高等学校教育研究会国語部会第1回役員会
期 日 令和4年6月14日
場 所 オンライン開催
案 件 令和4年度役員改選及び承認
令和3年度庶務報告
令和3年度監査報告, 決算報告
令和4年度予算案審議, 事業計画
- 2 令和4年度 青森県小・中・高国語教育研究協議会第1回理事会・研修会
期 日 令和4年6月上旬
場 所 書面開催
案 件 各部会活動状況報告
令和3年度庶務報告
令和3年度監査報告, 決算報告
令和4年度予算案審議, 事業計画
- 3 令和4年度 青森県高等学校教育研究会国語部会研究大会及び総会
期 日 令和4年8月18日(木)
場 所 青森県立八戸西高等学校
案 件 令和4年度役員改選
令和3年度庶務報告
令和3年度監査報告, 決算報告
令和4年度事業計画, 予算案審議
大会内容 公開授業(現代文, 古文, 漢文)
授業分科会, 研究協議会, 研究発表
- 4 高教研国語部会 各地区大会
中地区 青森西高等学校
東地区 八戸西高等学校(兼 県大会開催)
西地区 弘前実業高等学校
- 5 第68回東北地区国語教育研究協議会 岩手大会
研究主題 ことばの力が育ち, 学びを実感する国語学習の創造
—主体的で協働的な課題解決による質の高い学びを通して—
期 日 令和4年10月21日(金)
会 場 盛岡市立城南小学校 白梅幼稚園 岩手県立盛岡第二高等学校
- 6 令和4年度東北地区国語教育研究協議会役員会・研修会
期 日 令和4年10月21日(金)
場 所 サンセール盛岡
- 7 令和4年度 青森県高等学校教育研究会国語部会第2回役員会
期 日 令和5年1～2月
案 件 令和4年度庶務確認, 中間収支決算報告
令和5年度予算案審議及び事業計画案, 県大会実施内容
- 8 令和4年度 青森県小・中・高国語教育研究協議会第2回理事会・研修会
期 日 令和5年1月～2月
案 件 各部会活動状況報告
令和4年度庶務・中間決算報告
令和5年度予算案審議及び事業計画案
東北国研役員会報告

研究テーマ

紀要 (集)	年度	研 究 テ ー マ	会 場	会 員 数 (一・二希 望計)	大 会 参 加 数	大会 発表 者数
33	63	○国語の力を育てる指導を求めて	三 本 木 高 校	443	269	2
34	平成元	○言語を豊かにする指導法をさぐる	木 造 高 校	436	265	2
35	2	○豊かな国語力を養う指導を求めて	八 戸 北 高 校	431	635	2
36	3	○豊かな国語力を養う学習指導をめざして	青 森 高 校	408	263	6
37	4	○国語の力を高めるための効果的な学習指導のあり方	東 奥 義 塾 高 校	409	247	2
38	5	○的確な読解と豊かな表現の指導を求めて	八 戸 南 高 校	390	227	2
39	6	○興味を持たせるための国語の学習指導	青 森 北 高 校	243	232	2
40	7	○主体性を育む国語教育の学習指導	弘 前 南 高 校	387	236	2
41	8	○新しい学力観に立つ学習指導	青 森 中 央 高 校	372	205	2
42	9	○豊かな国語力を育む学習指導を求めて	八 戸 高 校	393	267	6
43	10	○学力充実を図るための指導法を求めて	五 所 川 原 高 校	367	166	2
44	11	○基礎学力の定着と応用力の充実をめざす学習指導	青 森 戸 山 高 校	393	193	2
45	12	○確かな国語力を育てる学習指導のあり方	八 戸 西 高 校	377	168	2
46	13	○自ら学び自ら考える力の育成をめざして —生きる力の指導法を探る—	黒 石 高 校	357	170	2
47	14	○国語の力を高めるための学習指導を目指して	青 森 東 高 校	353	174	2
48	15	○生きてはたらく国語の力～不易流行の視点から	弘 前 高 校	342	180	3
49	16	○豊かな国語力を育む学習指導のあり方	三 沢 高 校	344	123	2
50	17	○「生きる力」と「夢」を問える国語力を求めて	青 森 南 高 校	322	138	2
51	18	○「確かな国語力」の充実を目指して	八 戸 東 高 校	297	125	2
52	19	○豊かな表現力と確かな読解力を高める授業を目指して	弘前学院聖愛高校	294	134	2
53	20	○確かな国語力と思考力の向上を目指して	田 名 部 高 校	300	103	2
54	21	○確かな国語の力をはぐくむ指導の在り方	青 森 高 校	255	139	6
55	22	○人の中の国語 国語の中の人	木 造 高 校	255	110	2
56	23	○「国語」の遠近法—俯瞰と回遊—	青 森 西 高 校	308	112	2
57	24	○伝え合う力を高める言語活動の充実を目指して	三 本 木 高 校	298	99	2
58	25	○「ことば」を大切に国語教育の充実を目指して	弘前中央高校	298	134	2
59	26	○「言語活動」で引き出す主体的な学び	青 森 北 高 校	285	115	2
60	27	○確かなことばの力をはぐくむ国語学習 —思考力・表現力を高める言語活動の充実を通して—	八 戸 高 校	273	146	6
61	28	○感じる力、考える力、伝え合う力を高める国語学習をめざして	東 奥 義 塾 高 校	267	115	6
62	29	“新しい学力”を錬成する“新しい学び”の探究	青 森 中 央 高 校	264	106	2
63	30	○新しい時代に必要となる資質・能力を育む国語教育を目指して	八 戸 北 高 校	248	107	2
64	1	○「言葉による見方・考え方」を働かせる国語授業の創造	弘 前 南 高 校	264	127	2
65	3	○「確かで豊かな学びの創造 —「言葉による見方・考え方」を働かせて—	WEB開催	245	多数	1
66	4	○「ことばの力」を育み、学びの奥味がわかる国語学習をめざして	八 戸 西 高 校	224	87	2

